茨木慶三先生に捧げる言葉

島田常世

茨木慶三先生は京都市上京区の御出身で、昭和27年に京都大学文学部史学科を卒業され、同大学院で研究されたあと、昭和28年から39年まで京都市立堀川高校で教鞭をとられました。一方で昭和35年4月から三重大学学芸学部非常勤講師も兼務され、昭和41年には助教授、昭和48年からは教育学部教授として12年間御研究と御教授に励まれました。その間、昭和46年には文部省在外研究員としてウイスコンシン大学で一年間研鑽され、また京大、金沢大、神戸市立外語大などでも教鞭をとられました。

先生の御専門は18世紀アメリカ史の研究であり、アメリカ革命史に関する多くの論文や著書を残されております。また一方で、京都大学史学研究会評議員、日本西洋史学会会員、関西アメリカ史研究会代表幹事などを歴任され、アメリカ史研究の分野でも大いに御活躍されてこられました。

先生の御講義は日常の物静かな口調とはうって変わって熱っぽく、大きな声で歯切れ良い英語がポンポンとび出すものでありました。大学に入学して一番先に私共が不思議に思った事は、廊下や町角で必ず直角に進まれるということでありました。これは先生の几帳面で誠実なお人柄そのものをあらわすものです。一方、御結婚当時の奥様の御写真をいつも胸に持っておられるなど愛妻家で徹底したフェミニストでもあられました。また時には私共学生を連れて津の町を飲みに歩かれ、私共は先生を囲んで人生論や大学の自治について語り明かしました。またある時には、私共教え子の下宿でコタツに足をつっこんで泊って下さり、お風邪をひかせてしまった事なども懐しく思い起こされます。当時は全国的に大学紛争のさ中でした。先生は悩み多き私共学生の話に一つ一つじっくりと耳を傾けて下さり、温いアドバイスをいつもして下さいました。また先生は、「学研の徒たれ。」と、強調され、西洋史の演習などはアカデミックで自由な雰囲気の中で大いに語りあったものでした。

「卒論完成前には失恋をするな。」との先生の常々の御箴言にもかかわらず、京都のお宅に泊り込む「悪しき習慣」をつくったのも私共19期生であり、卒論のみならず、先生御夫妻に御媒酌の労を煩わしたのも私共からでした。

これからの先生の御健康と御活躍をお祈りして、意は尽せませんが謹んで先生に捧げる言葉とさせていただきます。（19期生）